

## 藤原宮出土の鬼瓦と面戸瓦

**鬼瓦** 飛鳥藤原第179次調査で出土した円形粘土塊は、鬼瓦本体と半環状把手を連結する部位であることが判明した(本書86頁図Ⅱ-8(下))。同様の遺物は、第24・27次調査出土の鬼瓦にもみられる(図Ⅱ-59-1)。この鬼瓦は『藤原概報9・10』で報告されているが、半環状把手と円形粘土塊には、言及していない。今回、この2種の遺物の用途を認識するため、完形に近い第24・27次調査出土の鬼瓦の製作技法を改めて検討した。

鬼瓦は藤原宮東面大垣北門付近の外濠SD170から出土した。右上隅を欠くが、平面形は長方形で上辺両隅を斜めに切り落とし、下端にはやや浅い半円形の削りがある。大きさは縦42.5cm、横31.8cm、厚さ6.5cmをはかる。三重弧文を飾り、裏面には半環状の把手を取り付ける。胎土には石英や長石などの白色鉱物とクサリ礫を少量含み、焼成はやや軟質で、色調は灰白色(5Y7/1)を呈する。

遺物の観察から製作技法を以下のように推測した。最初に厚さ3cmほどの粘土板を用意する。外縁部分と重弧文部分に相応の太さの粘土紐を貼り付ける。鋭利な工具を使い、外縁部分は断面方形に、重弧文部分は断面三角形に整える。最後に重弧文部分をヘラ状工具で粗くナデ調整し、外縁部分は平坦に仕上げる。円形粘土塊を用意し、粘土板裏面の所定の位置に据えて、円形粘土塊を埋め込むように粘土を貼り足して鬼瓦全体の厚みを増す。鬼瓦裏面および側面の調整法は不明。裏面には縦方向の直線的な凹凸がある。なにかの圧痕か。最後に、半環状把手を用意し、円形粘土塊上面と鬼瓦裏面に接合する。把手の接合部には薄く粘土を加えてナデつけている。

SD170出土鬼瓦の円形粘土塊は、第179次調査出土品と大きさ形態とも類似する。この用途について推測してみたい。把手は鬼瓦裏面に貼り付けるが、接合粘土が極めて薄い。一方、円形粘土塊は瓦当裏面に埋め込まれているために外れにくい。把手は円形粘土塊と接合することによって、鬼瓦本体との接合を強化したと考えられる。

鬼瓦を棟に固定するために半環状把手を使用する例は日本では極少だが、統一新羅初期(7世紀後半～8世紀初頭)の鬼瓦には例がある<sup>1)</sup>。ただし、新羅の把手は端部を鬼瓦裏面の穴に挿入し、接合粘土で固定する<sup>2)</sup>。技法

は異なるが、藤原宮の時期とも符合するため、朝鮮半島との関係も考慮する必要があるだろう。

**面戸瓦** 藤原宮朝庭SK11121から出土した面戸瓦は、『紀要2013』(以下前報告と表記)で報告したが、その後の調査で隅棟用であると判断したので再度報告する。

面戸瓦は両端を欠くが、舌部と袖部がよくのこる(図Ⅱ-59-2)。現存する長さは43.2cm、舌部の幅は20.3cm、舌部中央の厚さは2.3cmある。焼成前の丸瓦を成形した切り面戸瓦である。凹面には粘土紐の痕らしきものがあり、粘土紐作りの可能性が高い。凹面側縁を幅広く面取りし、凸面は縦位の縄タキ後に横位のハケメを施す。胎土には砂粒とクサリ礫を少量含み、硬質で、凸面は全体に灰色(N5/0)、一部、暗灰色(N3/0)を呈する。

前報告では、両端が欠けているため、大棟用のかぶせ面戸と隅棟用の登り面戸の可能性を考えた。しかし、左右対称のかぶせ面戸ならば全長は50cm以上となる。藤原宮大極殿院、朝堂院所用の軒平瓦の幅は最大でも33cmほどであるから、大棟用ではないだろう。

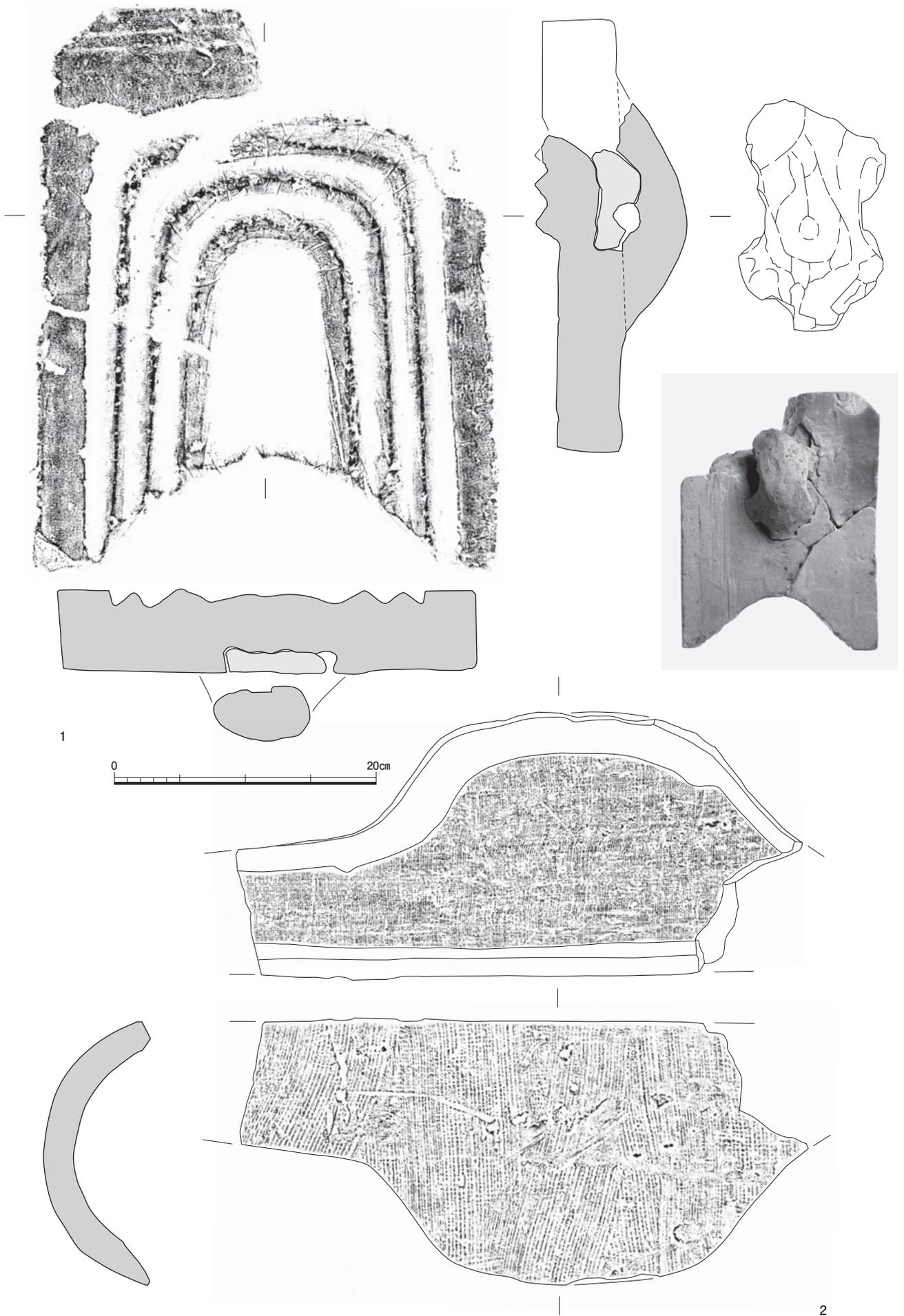
隅棟用の場合、隅棟は屋根に対して45度の角度をなし、軒平瓦の最大幅33cmとすると、面戸瓦の全長は $33\sqrt{2}=47\text{cm}$ 、軒平瓦の左右数cmずつ空けたとしても50cmほどに復原できる。類似の面戸瓦で袖端部が残存する例では、袖部の長さは15～17cmとなる。この個体の袖部の長さを15cmとすると、全長は48.6cmとなり、もう一方の端部が数cmほどで納まれば、全長約50cmに復原できる。

隅棟用と考えるもう1つの特徴は、舌部凹面の面取り幅が左右で異なる点である。舌部右半(袖側)では幅が3.5cmもあるが、舌部左半では1.5cmほどである。これは、丸瓦に対して面戸瓦を斜めに置いたために、丸瓦との接触面積が左右で異なることから生じたと考えたい。

以上から、この面戸瓦は、全長約50cmで片袖をもつ隅棟用の登り面戸瓦と判断した。今後、隅棟用面戸瓦を認定して、出土地点から使用建物を限定できれば、藤原宮内の屋根景観(寄棟造あるいは入母屋造)を推測する手がかりとなるだろう。今回の出土品は、出土位置から朝堂東第一堂の可能性が考えられる。(今井晃樹)

### 註

- 1) 井内功「古代棟端飾瓦の固定方法」『井内古文化研究室報』2、1969。
- 2) 梁淙鉉「慶州地域新羅時代鬼面文棟端裝飾瓦考察」『先史と古代』37、2012(韓国語)。



図II-59 SD170出土の鬼瓦とSK11121出土の面戸瓦 1:4